太郎兵衛水掛論

種蒔權兵衛の後継

服部應賀著

定價三錢五厘

A774

官許明治七年十一月八日

太郎兵衛水掛論

服部應賀著

○種蒔權兵衛の長男。太郎兵衛なる者い迂遠の学文を好ど唯家業の道を主とせもが尚王の四百余州ふ奔走し七八年旅寓ふあり我家の門前を三度通行せども寸陰を惜こて一度も家へ立いらず海川沼溝田畑の水利を通ぜし仁意を追ひて。用水悪水の便利を開き下田を上田ふ為

KR-7690

の委しきい所謂智者い水を以てたのしむの意ハ
よるや父い種蒔の名ハ高く子い為事成業ハ皆
水掛の名を採い農家といへども又一奇とされば過
年家僕ハ小作を命じて驛路ハ家作を建やりけるが
間もなく其家作類焼せしかへ太郎兵工父ハ又家
作を促しけるバ父い疾ハ家作料渡せバ再々
せばと云。太郎兵工云其家作料渠が身ハ付るバ
有るれども焼失せしバ是無るとの。論判數日
ハ及び近隣の者此論を聞て權兵工太郎兵工の

水掛論と言しも宜こさもとも太郎兵工父ハ迫て
いハ。原無の処へ父有の家作をして無とるれバ原
の無るりと理解して家作を元の如く営せけるが
日を重て此隣の酒喰屋より培糞の臭ハ万客追々
減て家業の妨るれが夫を除との使をよこせ。是
ハ驚き太郎兵工方へ来て云々をいハ太郎兵工一
筆を認めて是を以て答よと渡せバ。是ハいハ
るる答と聞がかへ。夫い隣の弦歌夜々喧くして
寢もこぶ。太も農業の妨るれバ家業同断の妨勘

定二一天作ノ筭當あるべしとの荅といへば。小
作男よろこびいさんで隣へ送りしゝ其後何の
沙汰もなし是を聞者又太郎兵工の水掛論と
いふ都て近邊ノ口論ならばまづ太郎兵工ノ裁
判をさせもべ其坐ノ論の非を去わたるがゆへ非を
火ノかへて火を消い水をかけるの上るけもべ太郎
兵工水掛論の名弥高し既ノ今日父より先へ山
田へ行て水車の用を渋せ父の来るを遅き找
但しけもべ古院の学社ノ居ときゝ水車を擔て

戻りたゞゝ学社ノ入いらもべ群集の者大殿ノあ
ふも父と村長との舌爭をたゞくるもべ人らげ
ノ忍て伺ひけるノ一個の歌舞者上坐へたゝみて
時勢断然の言を発しそもより續て上金する者
あれば是を納らも猶我父教訓をいろめきに
るを見て太郎兵工忍ろねて群躰の稲莚を掻と
けゝ上坐ふいたり村長ノ一礼して父ノ云ゆ
唯今歌舞某が芳言をいかゞ聞れしや賤業の
中より人の性善をあらいし時況ノ靡を是

塵埃の玉泥中の蓮ともいふべしかゝる貴人
たるを知て老躰の古習を弁論せるをかゝれ
今此大殿を見てさせば者嫗童男婦女多けれど
荊棘淫肆の譬へ馬耳風かゝる。吾不肖といへども其
人を見て教を解の志あるべ偏に吾を以て名代
らしめ早く新田ゝおもむきて人夫ゝ耕転
の差配あれ疾水路へ渉せたりといふより村長
も其儀然るべしといへば權兵衛一統へ會訳し
て立去けるべ有志の者へ渠が德實を敬ひて

坐を開き少女達へ太郎兵衛の泥足を見て衣服找
いゝゝして身をひゝけば其間く道へ一筋かれども
其志しへ二ありさて太郎兵衛へ父を見送りて
其かへりさゝ大殿ゝ張出しゝる諸人の名前を見て
け貧民と藝者娼妓の名札を残らべゝ〳〵村
長の前へ差出して云へり「我此者等が上金を弁納
するべ彼等ハ信志の〳〵懷られて金貨へそもく
戻しへと述べ村長名札をかぞへて「是へ貧民
と藝者擬女の名のみあるが譬へ貧民といへども其

古の聖人を
よく天理を
自得せしめ
身を学文の縛せら法
近年の銃学者を
自國産の自力を
なくさしめば何事も
外國の風をあこがれ

吾國律に繫縛の
索あるを切の
るゝ夫を
自身の自由と
誇化人なれば
古聖の
縛を解て
其索を
渠を縛する
者わゝバ是を
双明の天吏と
いふ歟

心々出る信を戻さいかへつて不仁のいとり既に印
度ふて〻貧女施物とさるものみけまづ髪を鬻で信
施とた「否。吾ふかあて〻い是を納ば其由いそも鰥寡
孤獨の身をあらせば才一ふ。妻ふとうまて便あく世で
さる業もるき中ふ子を育むを鰥といふ。才二夫ふたあを
子をいざき饉のたゝぬを寡とでいふ。才三世ふ拙るく
早く父母ふとうを身のなき処るき男を孤といふ。才四
年老て業もるゝぬふ養ふ子もあく露命ふせまる
者を獨といふ。世ふ憐るる者此上ふいるけまじも時義

ふよのて〻い苦ふ苦をかさねるともあらん扨藝者撻
女も皆貧民より出る者ふまじたらん　官の許印を
持ざるん是正業ふあらざるものを神佛祭事ふ促
されて貧苦の中の出金を笑ふて出さ者もあり又祐
福の旦那或い客より出ふもせよ清〻ぬ賊の如きい
修身洗家の基礎とさる此学社ふ我い納ば。雅君印
度の貧女をさそぶ印度ふまる長者の施金不浄に
して精舎の焼亡し例あり其一を志つて其二を志ぶ
物の名さへ悪い厭ふぶもへ聖い勝母の名を聞て其里

へき入ぬとある。我國近年府中の名。不忠の音の通
ぜるゆゑ是を静岡とあらためらるし例もありと理を
述て迫りけるゞ村長低頭して深志恐感のいろいろ
で命を肖べきさあれゞ童へ教訓をと促しけるゞ太
郎兵工庭前の蓮池へ持参の水車を仕ろけて童さ
ちを残らゞ招ぎ此車を互ゆ踏て水中の魚を獲よ
とゝんゞるゝりかしこしとみあく夫ゆかゝるを見て
太郎兵工上坐の村長ゆ對坐して夫書を見て圖を見
ざれゞ其人を見て其声を聞ざるゞ如くるゝゞされ

我業を圖ゆ表して教へとゝゝ侯農家の子ゆ他学ハ
注意ありさゝ若博く学び得ゞ。綴をまとひ泥膚
ゆいからゞしして都會へ走るべし是をいたんゞたゆ
童をさけぬと云つゝ又行て見るゆ案の如く池の
水干ざれゞ童を残らゞ其父母等ゞおる大殿ゆよ
びあゝゆて形をたゞし一ヲヤ能聞べし今踏しめし車
いかのしさちの身ゆ譬ふゝ池の魚ハ学文のたとへゝ
り水を干ハ修行のたとへありされゞ修行を積ぎ
ゝゞ学文の魚ハとらゝゝぬるゝを皆車をふむのゝ云つて

水のあと人戻るを忘らぬのい。修行ホ怠あが如し吾
さいぜん元へ水の戻る仕様をいさせーい主さの母人坊
暁を語の圖解えそも父い子を誠ホ愛をるがもへ厳ホ
学文をさせるい是成人のう人を思へばあり者うるホ父と
外を務るものるれば家ホ居を少きを者いて父の留守
ホい必其子母ホあまを狂惑をいく諸藝ともホおたれば
母ハ愚ホして藝を休せ物を喰せ我侭させうを愛をと
おりへど是いうみ子を憎が業あり或ハ父が子をいま
あんとをを必母其中の垣とみりて父のまへを呵るホ見

をそもども打擲手ホ力を入ざれがいよく母の気を呑
おうこと何事も父の前ハ母が取るをたものと思へば習ふ
べき業いあらんば不嘘偽のこ上手ホるれがかくれ
忍んでをう悪事も終ホい外よりあらハをさ父も
母も驚くといへども辟王の猿の如し此猿といふい昔
薛といふ國の王子太猿を獲て狙引ホ藝を仕こあと
いれが此猿ハ山ゑて。不ひをうホ身をもちるくへば大
食いをそもどもいうる藝ハおがへば者うるホ是非とも
ホ教るとき責殺をそうホかーと云々扱其悪子

母の姑嫁より父をばうとゝ母ゐかゝさしうりしゞ
斯るりくつゐまゝ母の身を苦むるを父よりもた
るなゝごゝさを母泣かこてゞ其理ゐ伏して心を改る
誓言をたつ至ども其子ゐいそのゞとき悪友あれゞ
改心の清水永くいたもうゞ又泥水ゐ流こゝて学矢
の魚いとゝゞ一生悪水の中ゐ游者多けもゞ母も子も
此圖解を見て合点ゞもうゞあるうゝこ太郎兵工ゞ
水拭論終。

太郎兵工脛
孫兵衛活計論　近刻

卍亭服部應賀新著作表題

當世利口娘　二号　近刻
出類大議論　上下
日本女教師
多限正札智恵の秤　三号
權兵衛種蒔論
洋学古切雀
新製兎美断語
同二号太郎兵衛水拭論
近世ひきれ墓
天上大珠事
同三号孫兵衛活計論
放言深山爲
金庫三代記　全三冊
市の虎狩
みそなる男
驕人ぢつ子笹
ニヤアチウ談
和談三才圖笑　全三冊
東京花毛抜　五冊
畑水練
豊年五穀祭　三
青楼半化通　全三冊
轉ぬ前の杖
大鉈託新文鬼談　三

010190524928

小說社中發兌書林

東京

小傳馬町三丁目　山嵜屋清七
大傳馬町三丁目　丸屋正五郎
神田須田町　高木和助
神田通新石町　紀伊國屋德藏
人形町通新乘物町　上州屋重藏
濱町三丁目五番地　星野松藏
東兩國元町五番地　鈴木勘二郎
大門通　浪花町　鶴屋喜右衛門

○